

第二章 神について、また聖なる三位一体について

第二節 神は御自身において完全に満ち足りておられる

第一節では、神がどのようなお方であるか、その御性質について学びました。第二節では、そこから一步進んで、**神と被造物との関係**が語られます。この節で中心となるのは、**神の自己充足**という考え方です。つまり、神は何か他のものによって補われなければ完全にならない方ではありません。神は御自身において完全に満ち足りておられます。

一 神は命と栄光と善と幸福のすべてを御自身のうちに持っておられる

ウ告白は、「神は、命と栄光と善と幸福のすべてを、自らの内に、自らによって、持っておられる」と告白します。ここには非常に重要な言葉が二つあります。「**自らの内に**」そして、「**自らによって**」です。私たちの命は、私たち自身の中にあるものではありません。私たちは両親から生まれ、食物を食べ、空気を吸い、水を飲み、他者との関係の中で生きています。私たちの存在は、常に何かに依存しています。しかし神はそうではありません。神は、誰かから命を受け取ったものではありません。ヨハネによる福音書 5 章 26 節で、「父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださった」と語られます。神は**命の源**です。そして、命だけではなく、栄光、善、幸福も、神御自身のうちに完全に存在しています。したがって、神は他から何かを借りて完全になる方ではありません。

二 神は御自身において、御自身に対して、完全に満ち足りておられる

続いて、「ただひとり、自らにおいて、自らに対して、全く満ち足りていて」と告白します。これは「神の自己充足」を最も端的に表しているところです。神は御自身だけで完全です。ここから、重要なことが分かります。**神は、私たちが必要として創造されたものではありません**。「神は寂しかったので人間を造られた」という説明を聞くことがあります。しかし、これは聖書の神理解とは合いません。もし神が人間を必要とされたのであれば、神は人間が存在することによって初めて完全になることになるはずです。しかし第二節は、神が「全く満ち足りて」おられると告白します。使徒言行録 17 章 24-25 節でパウロは、「世界とその中の万物とを造られた神が……人の手によって仕えてもらう必要はありません」と語っています。これは第二節の意味を非常によく表しています。

三 神は被造物を必要とされない

ウ告白はさらに、「御自身が造られたいかなる被造物も必要とせず」と述べます。ここで、創造者と被造物との違いがはっきりします。私たちは被造物です。したがって、私たちの存在そのものが神に依存しています。しかし神は、被造物に依存していません。神が私たちを造られたのは、神に不足しているものを私たちが補うためではありません。逆です。**すべてを神から受けているのが被造物です。**私たちが神を助けて神を完全にするものではありません。神が私たちを生かしてくださるのです。

四 神は被造物から栄光を受け取って完全になるのではない

さらに、「また、それらから何の栄光も引き出してくることなく」とあります。ここで、礼拝について一つ大切なことを考えることができます。私たちは礼拝の中で、「神に栄光を帰します」と言います。では、私たちが礼拝しなければ、神の栄光は減ってしまうのでしょうか。そうではありません。神の栄光は、私たちの礼拝によって増加するものではありません。太陽が、私たちが見ているから輝くのではないのと同じです。私たちは神を偉大にするものではありません。**すでに偉大であられる神の栄光を認め、賛美するのです。**ですから礼拝は、神の不足を補う行為ではありません。神の完全さに対する、被造物の感謝と応答です。

五 それでも神は御自身の栄光を被造物のうちに現される

ここで第二節は、非常に美しい方向へ進みます。神は被造物から何かを必要とされません。しかし、「ただ御自身の栄光を、それらの内に、それらによって、それらに対して、またそれらの上に」現されます。つまり、**神は必要がないのに、創造された。**ここが重要です。神が世界を創造されたのは、御自身の不足を埋めるためではありません。自由な御心によって、被造物に善いものを与えるためです。創造は神の不足から出たものではなく、**神の豊かさから出た恵み**なのです。詩編 19 編は、天が神の栄光を語り、天空が御手の業を示すと歌います。被造物は、それ自身が神になるものではありません。しかし被造物を通して、創造者の栄光が示されます。

六 神の知識は被造物に依存しない

第二節の後半は、神の知識について語ります。「神の目にはすべてのものがあらわで、明らかであり、神の知識は無限で、誤ることがなく、被造物に依存しない」とあります。ここでは第一節で語られた神の全知が、もう一度、被造物との関係において確認されています。私たちは、経験することによって知識を得ます。知らなかったことを学びます。しかし神は、被造物から情報を集めて初めて世界を知る方ではありません。神の知識は、被造物に依存しません。ヘブライ人への手紙 4 章 13 節は、「神の御前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されている」と語ります。

七 神にとって偶然も不確かさもない

そのため、「神には何事も偶然ではなく、また不確かでもない」と告白されます。これは私たちにとって大きな慰めになる言葉です。私たちには、人生の出来事が偶然にしか見えないことがあります。なぜこのことが起こったのか分からない。なぜこの人と出会ったのか分からない。なぜこの苦しみを経験しなければならないのか分からない。しかし、私たちにとって不確かなことも、神にとっては不確かなことではありません。ただし、これは「人間の苦しみもすべて神が冷たく操作している」という意味ではありません。むしろ、私たちには理解できない現実の中にも、神の知恵と御心があることを信頼するということです。

八 神はその意向、御業、命令において聖である

最後に、「神はそのすべての意向と、すべての御業と、すべての命令において、最も聖である」と告白します。ここで第一節とのつながりが出てきます。神は聖なるお方です。そして、その聖性は神の存在だけにあるものではありません。神の御心も、御業も、命令も聖です。したがって、私たちが神に従うことは、単なる宗教的習慣ではありません。聖なる神に対して、被造物としてふさわしく応答することです。

九 すべての被造物は神を礼拝する

だから第二節は最後に、「天使も人間もその他のどんな被造物も、神が求めることをよしとされるどのような礼拝も奉仕も当然ささげるべきである」と結びます。ここで第二節の全体が一つにつながります。神は私たちを必要とされません。しかし私たちは神を必要としています。神は私たちから栄光を受けて初めて栄光ある方になるものではありません。しかし私たちは、神の栄光を認めて礼拝するように造られています。神からすべてを受け、神にすべてを返す。これが被造物としての私たちの姿です。

第二節のまとめ

第二節の中心は、「神の自己充足」です。神は、

- 命、栄光、善、幸福のすべてを御自身のうちに持っておられる。
- 被造物を必要とされない。
- 被造物から栄光を受け取って完全になるのではない。
- それでも自由な御心によって、被造物に御自身の栄光を現される。
- すべてを知り、何事も偶然でも不確かでもない。

- 御自身の意向、御業、命令において聖である。
- だからすべての被造物は神を礼拝し、仕えるべきである。

ということです。そしてここには、**創造の意味**があります。神が世界を造られたのは、神が何かを必要としたからではありません。神の豊かさから、自由な恵みによって被造物が生み出されたのです。この点は、第三節の三位一体理解にもつながります。なぜなら、神が世界を造られる以前から、神御自身のうちには完全な命と交わりがあるからです。

第三節 三位一体——唯一の神の中にある三つの位格

第二章の第三節は、ウ告白の中でも特に重要な箇所です。ここで三位一体が告白されます。まず、本文そのものを確認します。

「神〔であること〕の単一性の中に、同じ一つの本質、力、永遠性を持つ、三つの位格がある。父なる神、子なる神、聖霊なる神である。御父は何ものにも由来せず、生まれもせず、出てくることもない。御子は御父から永遠に生まれる。聖霊は御父と御子から永遠に出てくる。」

この短い文章の中に、三位一体についての重要なことがほとんどすべて含まれています。

一 「神の単一性」

最初に、「**神の単一性**」と言います。つまり、神は一つです。これは第一節から一貫しています。「ただひとりの、生ける、まことの神」です。申命記 6 章 4 節の「主は唯一の主である」という告白を、キリスト教会もそのまま受け継いでいます。したがって、三位一体とは、**三人の神を信じることではありません**。神は一つです。

二 しかし、その唯一の神の中に三つの位格がある

ところが続いて、「**三つの位格がある**」と告白します。ここが三位一体の核心です。**一つの本質と三つの位格**。「本質」と「位格」は同じ意味ではありません。「神とは何か」と問えば、**一つの神性、一つの本質**。「誰が神なのか」と問えば、**父、子、聖霊の三位格**、ということです。したがって、「一は三であり、三は一である」という単純な数学的矛盾を教えているわけではありません。**神の本質は一つ、位格は三つ**という告白です。もちろん、これによって三位一体の神秘を完全に説明できるわけではありません。むしろ教会は、聖書が証しすることを越えて神を説明しようとしません。

三 父・子・聖霊はそれぞれまことの神である

「父なる神、子なる神、聖霊なる神である」と告白します。ここで重要なのは、父だけが神なのではない。子だけが神なのでもない。聖霊だけが神なのでもない。**父も神、子も神、聖霊も神**。しかし、**神は三人ではなく、一人の神です**。これが教会の告白です。マタイによる福音書 3 章 16-17 節のイエスの洗礼は、このことを考えるうえで重要です。子なるイエスがおられ、聖霊が鳩のように降り、天から父の声が聞こえます。三つの位格が区別されています。しかし、三人の神が登場しているわけではありません。またマタイ 28 章 19 節では、「父と子と聖霊の名によって」洗礼を授けるよう命じられます。「名」は単数です。父・子・聖霊が一つの神として告白されています。

四 「父は何ものにも由来しない」

ここから、三つの位格の相互関係が語られます。まず、「御父は何ものにも由来せず、生まれもせず、出てくることもない」とあります。これは、父が神として他の位格より上位にいるという意味ではありません。父も完全な神です。子も完全な神です。聖霊も完全な神です。ここで言われているのは、**位格の区別の仕方**です。父は「父」として存在し、御子は「子」として存在し、聖霊は「聖霊」として存在します。

五 「御子は御父から永遠に生まれる」

次に、「御子は御父から永遠に生まれる」とあります。ここは誤解されやすいところです。「生まれる」と聞くと、私たちは時間の中で子どもが誕生することを考えます。しかし、ここでいう「永遠に生まれる」は、**御子には始まりがある**という意味ではありません。ヨハネによる福音書 1 章 1 節は、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と語ります。御子は被造物ではありません。御子は永遠から父と共におられる神です。「生まれる」という表現は、御子が父との関係において「子」であることを示しています。したがって、ここには時間的な始まりはありません。**永遠から父と子の関係がある**ということです。

六 「聖霊は御父と御子から永遠に出てくる」

そして、「聖霊は御父と御子から永遠に出てくる」と告白します。これも時間の中で何かが発生したという意味ではありません。聖霊も永遠の神です。ヨハネによる福音書 15 章 26 節は、「父のもとから出る真理の霊」について語っています。ここは教会史上、「フィリオクエ」の問題にもつながります。西方教会は「父と子から発出する」と告白し、東方教会は「父から発出する」と告白してきました。ウェストミンスター信仰告白は西方教会の伝統を受け継いでいます。ただ、この歴史的問題を説明する際にも、一番大切なのは、**聖霊を父や**

子より低い存在として考えてはいけないということです。聖霊は神の「力」や単なる「働き」ではありません。聖霊御自身が神です。

七 三位一体は抽象的な数学ではない

三位一体について、「一なのに三とは、矛盾ではないか」と問われることがあります。しかし、教会が告白しているのは、一つの**本質**と三つの**位格**です。同じものを一と三としているわけではありません。それでも、三位一体は私たちの理性によって完全に把握できるものではありません。だからこそ、三位一体は「数学の問題」として解決するべきものではありません。これは神御自身についての啓示です。父が御子を遣わし、御子が父に祈り、聖霊が遣わされる。その救いの歴史の中で、唯一の神が父・子・聖霊として働いておられる。教会はその聖書の証言を受け取って、**父・子・聖霊なる唯一の神**を礼拝してきたのです。

八 三位一体は救いそのものに関わる

三位一体は、難しい教義を正しく理解するためだけに必要なものではありません。私たちの救いそのものが、父・子・聖霊の働きだからです。父なる神は御子を遣わされました。御子は私たちのために受肉し、十字架と復活によって救いを成し遂げられます。そして聖霊は、その救いを私たちに適用し、私たちのうちに働かれます。したがって三位一体は、**救いを説明するために後から付け加えられた理論ではありません**。福音そのものを守るために教会が告白してきた信仰なのです。

九 三位一体と「神は愛である」

ここからは、ウ告白そのものを少し越えて考えてみるができます。第一ヨハネ 4 章 8 節は、「神は愛です」と語ります。三位一体の教理は、この「神は愛である」という告白とも深く関係します。神が永遠から完全に孤立した一者であるなら、「神は愛である」という言葉をどう理解すればよいのでしょうか。愛は、相手に向かうものです。三位一体の神には、永遠から父と子と聖霊の交わりがあります。したがって、神は世界を造って初めて愛することができるようになったわけではありません。**神は永遠から愛である**。創造も救いも、神の不足を補うためではありません。第二節で学んだ神の自己充足と、第三節の三位一体はここで結びつきます。神は完全に満ち足りておられる。そしてその完全な神の豊かな愛から、被造物への恵みが与えられるのです。

第三節のまとめ

第三節の中心は、次の一文にまとめることができます。**唯一の神が、父・子・聖霊という三つの位格において存在される**。父・子・聖霊は、同じ一つの本質を持つ・同じ力を持つ・同

じ永遠性を持つ。しかし位格としては区別される。そして、父は何ものにも由来しない。子は父から永遠に生まれる。聖霊は父と子から永遠に出る、という関係があります。ここで重要なのは、「三つの神」ではなく「三位の唯一の神」ということです。そして、この教理は抽象的な哲学ではありません。私たちが、父なる神に祈り、御子イエス・キリストによって救われ、聖霊によって神との交わりに生きる、その信仰生活そのものが三位一体の神を土台としているのです。

第二章全体を振り返ると

第一節は、「神はどのようなお方か」を語りました。第二節は、「その神と被造物との関係はどういうものか」を語りました。第三節は、「その唯一の神は、父・子・聖霊としてどのようなお方か」を語りました。ですから第二章は、単に「神の属性を覚える章」ではありません。唯一の、生ける、まことの神を知り、その神が御自身の豊かさから世界を創造し、父・子・聖霊として私たちを救ってくださることを告白する章なのです。そして第一節で出てきた「神は愛に満ち、恵みに富み、憐れみ深い」という告白と、第二節の「神は被造物を必要としない」という告白、第三節の三位一体の告白を一緒に読むと、**創造と救いは神の不足を補うためではなく、神の自由な愛と恵みから出てくる**という理解が見えてきます。